

世界の農業機械・資材トレンド

ヨーロッパの農機実用テストの権威、ドイツ「profi」誌に掲載された世界の農機の最新情報

Machine sales shift into top gear during 2009
オーストラリア

2009年は農業機械の販売が絶好調



米国の農業情報誌「アグリビュー」アラン・カーステン氏によると、09年度のオーストラリア国内のトラクタ販売実績は前年比12%増の1万1500台だった。コンバイン部門の販売実績も同年は954台、これは過去3年間の平均の2倍以上だ。06～08年の間、コンバイン部門は毎年440台と不振だったが、09年度は02年度以来の1000台の万台に乗る勢いだ。

同氏の分析によると、トラクタ部門で大きな変化が起こっている。ここ数年、田舎暮らしのライフスタイルを求めて都会から田舎に引っ越す人々にトラクタが売れていた。その需要が一段落して、いわゆる「本物の」農業経営者たちが新しい機械を購入しているというのだ。

この動きは政府が昨年度予算に盛り込んだ農業機械への税制優遇措置に、農業経営者が反応したともいえる。この措置の期限は今年までだから、09年中に駆け込みでトラクタを購入した農業経営者も多い。したがって今年前半には、逆にトラクタの需要が落ち込む可能性があるとかカーステン氏は考えている。

同氏は地方経済の基盤は強固であると判断しており、「砂糖相場の見通しはかなり明るいし、穀物産業界は全国的に順調な伸びを見せている。ただ、09年に前倒しされた取引がどれほどの規模だったのか懸念される」と語っている。



09年度のコンバインの販売台数は1000台の万台が目前だった。

Road- and field-friendly drills
米国

一般道路にも優しいドリルシーダ



米国の農業機械は、見渡す限り広がる大規模農場で使うのだから、幅は広ければ広いほうがいいのではと誤解されている。だが、実際はそうでもない。なぜなら田舎のカンザス州でも人口の多いメリーランド州でも、農業経営者は一般道路を通じて農機を移動しなければならぬ。しかしその道路は、現代の大型機械が走行することを想定していない。そしてまた道路を利用する他のドライバーたちが昔のおおらかさを急速に失って、自分たちの縄張りに入ってくるバカでかくてスピードの遅い農業機械を嫌がるようになってしまった。

その結果、農業機械メーカーは一般道を走行する場合を考慮して操作性を高める工夫を迫られている。その典型的な例がグレート・プレーンズ社製の3007HD型ドリルで、この機種は作業幅が9mあるが、一般道路を移動する時には車幅が3mになる。オペレーターが運転席で操作できる油圧式3分割折りたたみシステムで、巨大な装置は車体の前と下に収納される。

同機種には容量3500ℓのホッパー一対が搭載され、種子だけでも液肥と混合しながらでも、正確に穿孔して水圧を利用したシステムで一定の深さに種子を播く。



米国のグレート・プレーンズ社製ドリルは幅9m。しかし走行時には3分割折りたたみ方式によって車体の前と下に格納され、車幅は3mになる。



New converts to no-till planting

南アフリカ

不耕起農法への転換

「不耕起農法は素晴らしい。私は播種床準備のコストを慣行農法と比較して、不耕起農法の方がずっと安上がりだということを確認した。不耕起農法は大規模農業経営にこそ適していると、私はずっと考えていた。この地域は家畜が放牧されているので、土壌表面が踏み固められている。播種機が固い地面に見事に種を播いて行く様子を見て感動した」とムベラ氏は語った。



不耕起農法用の播種機なら、家畜が踏み固めた土地でも播種できる。

これではトラクタや作業機を借りることもできない。熱心な農業経営者で、かつコントラクターでもあるサイモン・ムベラ氏は、不耕起農法に魅力を感じている。彼は昨年のナンボ農業展示会で、ピーターマリッツバーグ市を拠点とするヴァリクイップ社のチームと出会った。その後の数カ月間で、同社は独占販売権を得たばかりのベラルーシ・トラクタ2台とスプレイヤを提供し、ブラジルのヴェンス・トワード社の農業機械を輸入販売しているイントラック・トレーディング社にも声を掛けて4条不耕起播種機を提供してもらい、ムベラ氏が考える不耕起農法を更に発展させるための支援計画をまとめた。



グリホサート散布後の畑で生育する大豆。

High hours clocked in Finland.

フィンランド

フィンランドの過酷な試練



新しいトラクタのための厳しい試練としてはどうなのだろうか？フィンランドの請負業者ヴェイヨ・フルカス氏は、昨年の秋に新しいヴァアルトラ社製のT162型フェルサを購入した。その時に下取りに出した130型の積算稼働時間は1万2000時間だった。

フルカス氏の会社は、早速、購入したT162型を週に7日、6人チームが交替で1日24時間操作して最初の6週間で、稼働1000時間を達成した。一体、どんな仕事をしたのかと言っと、厚く雪が降り積もったローカル道路で、通行車線を示すための標識を70m間隔で設置していたのだ。働いているのは運転者だけではなく、トラクタに搭載されているプラットホームでは別のオペレーターがドリルを操作して標識を設置する作業をする。そして、プラットホームの後には軽量トレーラーが牽引されているという具合だ。フルカス氏は、自分が所有する各トラクタが年間3000時間稼働するように配置しているつもりだが、新たに投入した例の新しいT162型も既に4000時間を越えている。



Dutch tug
オランダ

オランダ製トレーラー



スラリー散布機で知られるオランダの農業機械メーカー・ボメク社が、アッセン市で開催された展示会に低荷台トラックトレーラーを出品した。トレーラーに積載されていたのは34条型のグリーンスター・フレックス牽引式スラリー地中散布機。これにはちょっと驚かされた。同機種は散布パイプの間隔が22cmで散布幅は5.3m、6.2m、7.5mと8.8m。移動する時にスラリーが路面に滴ることのないように全てのパイプは（上向きに）直角に折りたためる。また、ボメク社にはパイプ間隔25cmで、散布幅が各12m、15m、18mのグリーンスター・マルチもある。

同社の説明によると、両機種に搭載されているパイプ先端部の形状の長所は、僅かな力で地面に溝が切れるので頑丈な注射器のような構造にする必要はない。ドイツ国内では一般的な散布ホースよりも、こちらの方が好まれるようだ。

このトウエンテ低荷台トレーラーは、特に各種装備を牽引して複数の農場を移動する必要があるコントラクターを対象とした機種で、車体重量は8t、積載重量は最大32t。価格は3万5000ユーロ（1ユーロ＝1200円換算で420万円）とのこと。



ボメク社がアッセン市の展示会に出品した製品には、スラリー散布機や新型トレーラーが含まれていた。